

学校課題を解決し、社会の要請に応える総合的な学習の時間の設計

河村 正 志 福地 淳 宏
岐阜市立柳津小学校 岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター

Design for Comprehensive Learning for Solving Problems and Meeting Social Demands in School Subjects

Masashi KAWAMURA, Atsuhiko FUKUCHI

キーワード：学校課題 社会の要請 探究課題 横断的・総合的 生命の尊厳

I. はじめに

1. 総合的な学習の時間への期待

現行の学習指導要領には、新たに前文が設けられている。そこには、今後の教育を貫く理念として、次のことが明記されている。「一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」¹⁾ この前文をはじめ、現行の学習指導要領には、この先10年を見据えて、目の前の児童生徒に、持続可能な社会の創り手となるべく資質・能力を育成することの重要性和具体的な方向がしっかりと謳われている。そういった資質・能力は、教育課程全体を通して育成されるものであることを踏まえると、横断的・総合的な学習と探究的な学習を重視する総合的な学習の時間が果たすべき役割への期待が、これまで以上に高まっていると考える。

2. 実践研究対象校

本実践研究は、岐阜立柳津小学校を対象として行う。本校は、理科教育についての研究の歴史が長く、昭和52年にソニー最優秀賞を受賞し、平成31年度には、全国小学校理科研究協議会研究大会が岐阜県で催された際の会場校として研究実践を提案した。現在においては、低学年の生活科と全学年の理科の教育を基盤とし、正解のない問いに満ちた新しい社会を生き抜く力を念頭に、「新たな価値を生み出せる子の育成」を研究主題に掲げ、主体的に問題解決を図る学習の充実に努めている。しかし、児童が、これまで理科等の教科学習で高めてきた問題解決力を生かし、10年先においても持続可能な社会の創り手として、新たな価値を創造し続ける力を一層身に付けるために、社会と関わりながら、横断的・探究的に学ぶ総合的な学習の時間の在り方については、研究を深める余地がある。

II. 実践研究の方法

1. 研究の目的

「総合的な学習の時間では、児童の成長とともに、学校や教師、地域も変容する。」²⁾ と「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開」(令和3年3月 文部科学省)に記載されている。また、「総合的な学習の時間の目標は、その学校の教育目標と直接つながるものである」³⁾ と、小学校学習指導要領(平成29年度告示)解説 総合的な学習の時間編(平成29年7月 文部科学省)に記載されるように、総合的な学習の時間の学校教育における意義は大きい。

しかし実際には、各学校において定めることとなっている目指す資質・能力が明確になっていなかったり、児童の探究的な学習が主体的に展開できる指導計画に至っていなかったりなど、学校によって様々な取組状況が見られる現状がある。そこで、本校においては、生活科や理科の実践研究を中心に積み上げてきた実績を生かしながら、総合的な学習の時間のもつ役割を有効に機能させ、学校課題を解決し、社会の要請に応える総合的な学習の時間の設計の在り方について検討していく。

2. 研究の重点及び進め方

本研究においては、学校課題の解決と社会の要請に応えるという2つの視点を踏まえ、総合的な学習の時間の全体計画を作成することに重点を置く。具体的には、学校における総合的な学習の時間の意義や全体計画の目標及び内容を定める際の考え方について、以下の3点から実践研究を行う。

- (1) 学校課題と社会の要請から捉えた総合的な学習の時間で取り組むべき課題の把握
- (2) 学校課題を解決し、社会の要請に応える視点から捉えた総合的な学習の時間の意義の明確化
- (3) 意義を具現する総合的な学習の時間の目標及び内容を含む全体計画の作成と実践

成果と課題については、全国学力・学習状況調査（文部科学省）における児童質問紙調査、保護者による学校評価、及び実践における具体的な児童の姿等をもとにして検証を行う。

Ⅲ. 実践内容詳細

1. 学校課題と社会の要請から捉えた総合的な学習の時間で取り組むべき課題の把握

総合的な学習の時間においては、学習指導要領に示された目標を踏まえ、各学校において目標や内容を定めることになっている。そのため、その設計にあたっては、まず「今、学校として解決すべき課題は何か」と「これからの社会はどう発展し、どのような資質・能力が要請されているのか」の2つの視点から、総合的な学習の時間で取り組むべき課題の実態把握を行う必要がある。

(1) 学校課題から捉えた実態把握

①全国学力・学習状況調査（児童質問紙）から

まず始めに、児童の実態を分析した。文部科学省が実施する全国学力・学習状況調査は、自校の教育活動を客観的に捉えることができる有効な調査である。その中に、総合的な学習の時間に関する質問項目として、毎年継続的に調査されている指標がある。また、総合的な学習の時間の実施状況は、教科の学力等と相関があると指摘されるように、学校の教育活動の重要な鍵となっている。そこで、まず、全国学力・学習状況調査（平成31年度実施）の児童質問紙の結果から課題を分析した。

表1 全国学力・学習状況調査児童質問紙回答結果

質問事項（ ）は児童質問紙の質問番号	本校	全国
(31) 総合的な学習の時間では、自分の課題を立てて情報を集め整理して調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいると思いますか。	52.7%	66.5%
(30) 授業で学んだことを他の学習に生かしていますか。	81.4%	82.8%
(35) 5年生までに受けた授業では課題の解決に向けて自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか。	72.1%	79.6%

表1のように「総合的な学習の時間では、自分の課題を立てて情報を集め整理して調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいると思いますか。」という問いに対して、「そう思う・どちらかというと思う」と答えた本校児童の割合は、全国平均と比較して－13.8ポイントとなっており、主体的な探究が十分に展開されていないことが伺われる。また、授業で学んだことを他教科等と接続する力も全国平均より1.4ポイント低いことが明らかとなった。

②保護者学校評価から

学校評価は、学校課題を明らかにし、学校改善を図るツールである。そこで、本校では、学校評価を児童と保護者と同一の17の項目で年間2回実施している。さらに経年変化を捉えるために、評価の観点を固定し、成果と課題を洗い出している。

この結果、図1のように評価項目「お子さんは学習に対する主体的な取り組みはできていますか。」に対して、「よくあてはまる・あてはまる」と答えた割合は、平成31年度は68.7%で全項目中2番目に低く、令和2年度は73.1%で3番目に低い結果となった。

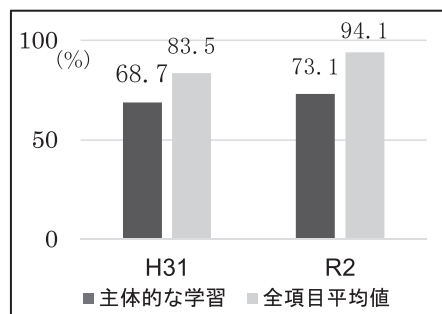


図1 保護者による「主体的な学習」学校評価の割合

③学校独自調査から

学校が解決すべき課題には、将来を見据えた課題もあり、これは保護者と共有することが重要である。そこで、児童が将来を生きる上で必要となる力を保護者はどのように捉えているかを調査した。調査は、令和元年6月に保護者を対象に主体性、課題発見、問題解決、リーダーシップ、創造性、チャレンジ、忍耐力、自己肯定、コミュニケーション、多様性の受容の10項目について問う形で行った。これらの項目は、教育再生実行会議による第七次提言「これからの時代に求められる資質・能力と、それを培う教育、教師の在り方について」(2015)⁴⁾を参考とした。この調査の結果からは、保護者は、児童が将来社会を生きる上で必要な力として「問題解決」、「コミュニケーション」、「チャレンジ」の3つの力を強く身に付けてほしいと考え、特に問題解決の力は、図2のように保護者の95%が必要であると考えていることが判明した。

以上、学力・学習状況調査、保護者学校評価、学校独自調査の3つの実態からみた学校として解決すべき課題は「主体的な探究」、「他教科等との接続」、「問題解決の力」であり、これらを総合的な学習の時間を通して育成する必要があると考えた。

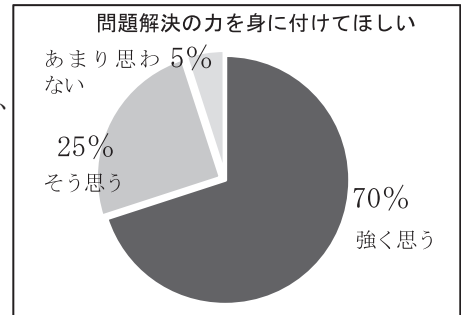


図2 問題解決の力を必要とする保護者の割合

(2) 社会の要請から捉えた実態把握

①社会の動向の見極め

OECD Education 2030 プロジェクトは、世界の社会情勢を踏まえた今後の教育の指針を示す羅針盤でもある。白井俊(2020)「OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来 エージェンシー、資質・能力とカリキュラム」によると、2030年の社会では、移民の増加、地球環境の変化、自然災害の増加、政治に対する信頼の低下等が生じると予測されている。その解決のためにはエージェンシーが必要となり、「自分たちの実現したい未来をそもそも自分で考えて目標を設定し、そのために必要な変化を実現するために、行動に移していくこと」が重要であると述べられている。しかし、日本の若者を見た時、「自分は責任がある社会の一員だと思う」や「自分で国や社会を変えられると思う」と回答する割合がアメリカやヨーロッパ、アジアの若者と比べてきわめて低く、そうした解決のために必要な力として、「新たな価値を創造する力」、「対立やジレンマを克服する力」、「責任ある行動をする力」の3つが重要であると挙げられている。⁵⁾ 未来の社会を生きる児童を育成する学校において、こうした社会の動向を見極め、これから求められる資質・能力を明らかにすることは、学習指導要領の前文で述べられているように、「持続可能な社会の創り手」を育てるという観点から極めて重要である。

②市町村の教育の方針等の具現

学校の教育計画に記載する課題や方針には、学校の設置者である各市町村で作成する教育大綱や教育基本方針等が反映される。なかでも教育大綱は、教育に関する施策の目標や根本となるべき方針を示したものであり、この視点から総合的な学習の時間の目標を設定することも必要である。

基本方針 学校・家庭・地域の誰もが**生命の尊厳を理解し、互いに心を開く対話を重ね、一人ひとりが価値ある大切な存在として互いに認め合う教育を推進する。**

基本方針に込めた願い 私たちが、さまざまな人と関わりながら、より良い人生、幸せな人生を生きていくためには、**生命の尊厳を理解**することを前提として、互いに心を開く対話を重ねる中で、**一人ひとりが互いを価値ある存在として認め合う**ことが必要です。**生命の尊厳への理解**とは、かけがえのない生命をいとおしみ、自らもまた多くの生命によって生かされていることに応えようとする心の表れを言います。

図3 岐阜市教育大綱 一部抜粋

命の尊厳」への理解を深める「生き方の探究学習」を位置付け、全市的に取り組む計画が教育委員会から求められている。このことは、総合的な学習の時間の目標にある自己の生き方を考えていくことにつながるものであり、自校にとっても普遍的かつ喫緊の課題であると捉えた。

以上、社会の動向、岐阜市の教育の方針等からみて、本校として認識しなければならない課題は、「未来社会を拓く力」、「生命の尊厳」、「生き方の探究」であり、これらを総合的な学習の時間を軸に教育課

本市では、図3にあるように、令和2年12月に「岐阜市教育大綱」⁶⁾が改定された。その中では、本市で2019年に発生した、いじめを背景として尊い命が失われた事案の重大さを受け止め、「生命の尊厳」が重要なキーワードとなっている。さらに、これを受けて教育課程の中に「生

程全体を通して育成する必要があると捉えた。

2. 学校課題を解決し、社会の要請に応える視点から捉えた総合的な学習の時間の意義の明確化

学校課題や社会の要請から明らかになったように、総合的な学習の時間の果たすべき役割と込められた期待は大きい。そこで、学校が捉える総合的な学習の時間で行う教育の意義の中身を明確にするため、取り扱う内容と育みたい資質・能力の2つの面から設定して、図4のように描いた。

まず、総合的な学習の時間に扱う内容として、「生命の尊厳」、「生き方の探究」を位置付けた。これは、加速度的に変化し続けるこれからの時代において、かけがえのない生命を愛おしみ、自らもまた多くの生命によって生かされているという「生命の尊厳」の理解と一人一人が自己の「生き方の探究」をしながら、自己の選択と行動によって夢と希望に満ちた幸せな未来を創り出せる力を育むことが、今後益々重要になると考えたからである。また、このことは、持続可能な社会の創り手としての自覚を深め、SDGsの実現にもつながるものであると考えた。

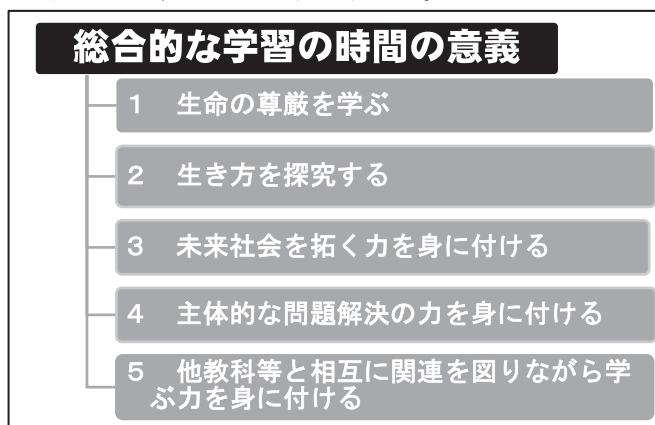


図4 総合的な学習の時間の意義

次に、育成すべき資質・能力として、「未来社会を拓く力」、「主体的な問題解決の力」、「他教科等と相互に関連を図りながら学ぶ力」を位置付けた。これは、獲得した知識や技能を、未知の状況や激しく変化する状況においても適用することや、社会とつながる質の高い学びを繰り返すことによって、相互に関連させながら、児童自らが未来社会を創造する主体者としての意識と行動を身に付けることが重要になると考えたからである。つまり、人として大切にしなければならない普遍的な内容の探究を通して、持続可能な社会の創り手としての資質・能力を身に付けることに、総合的な学習の時間の大きな意義があると捉えた。

3. 意義を具現する総合的な学習の時間の目標及び内容を含む全体計画の作成と実践

総合的な学習の時間が機能するためには、明確にした意義を全体計画に反映させることが極めて重要である。そこで、総合的な学習の時間の意義を、学校において定める目標と総合的な学習の時間の構想図、育成を目指す具体的な資質・能力の具体化の3つに反映させ、指導全体を設計した。

(1) 目標の設定

本校における総合的な学習の時間の出口は「生き方の探究」、「生命の尊厳」である。そのことを明確にするために、目標に「生き方の探究・生命の尊厳」をテーマとすることを明記した。さらに、本校の学校課題及び社会の要請から導き出した「未来社会を拓く力」、「主体的な問題解決の力」、「他教科等との接続」、を育成すべき資質・能力として図5のように、目標に位置付けた。

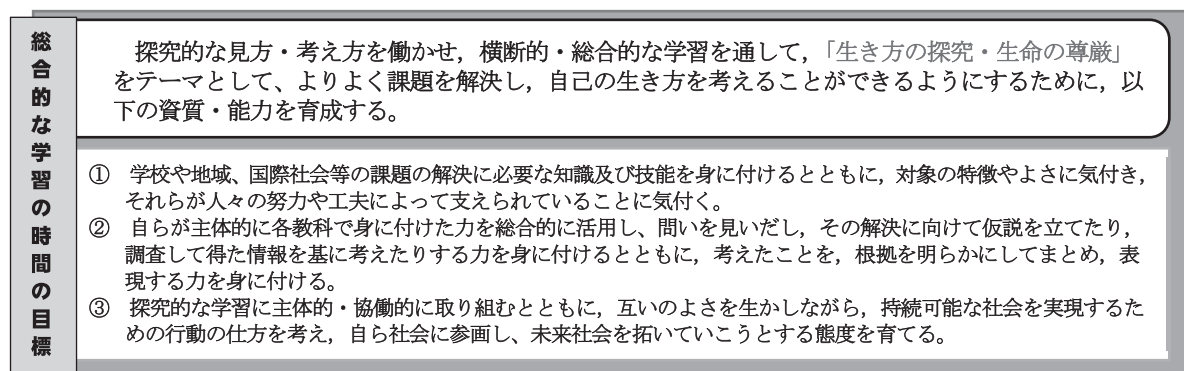


図5 本校の設定した総合的な学習の時間の目標

（２）総合的な学習の時間を中核とした「教育課程デザインマップ」の作成

これまで述べてきたとおり、本校の総合的な学習の時間において最重要課題として扱う「生き方の探究・生命の尊厳」は、これからの教育を構想する上で、根源的で極めて重要な内容であり、学校全体の教育活動を通して、系統的に育成していく必要があると考えた。そこで、本校では「生き方の探究・生命の尊厳」に関わる指導のコンセプトが分かるように、総合的な学習の時間を中核として、教育課程全体を編成する上でのデザインマップとして、『「生き方の探究・生命の尊厳」柳津SDGs学習』を図6のとおり作成した。この構想図を構成するのは、「生命の尊厳」の指導系統、核となる活動、探究課題、教科等との関連である。以下に、作成上大切にしたい点を述べる。



図6 「生き方の探究・生命の尊厳」を基盤に捉えた指導構想図

①「生命の尊厳」の指導系統の設定

テーマにある「生命の尊厳」の理解を確実に児童が進めていくために、本校がこれまで積み上げた理科の研究をもとに、生命観を「価値」「連続性」「関係性」「有限性」「機能性」「感覚性」の6つから構成されると規定して系統的に指導していく構想を立てた。⁷⁾

学年系統として、低学年から「有限性」「関係性」「連続性」と発展していくものとし、教科では主に「機能性」を、道徳や特別活動では主に「感覚性」を視点として育成していく、最終的には生命にかかわる「価値」の獲得に至るという構想を描いた。

また学年毎に「生命の尊厳」に関わるキーワードとして、「命の神秘」「命を守る」「命の結びつき」「命の尊厳」を設定し、学年毎に育てる価値を明確にした。第6学年では「命の尊厳」という学年のキーワードを具現する活動の一環として、1994年、当時13歳だった清輝さんを亡くされた大河内祥晴さんをお招きし、命の大切さを講演していただく活動を位置付けた。

②育成したい「探究的な見方・考え方」の具体化

総合的な学習の時間の課題の一つにも挙げられている「育成する資質・能力」を具体化するために、総合的な学習の時間で働かせたい「探究的な見方・考え方」を明確にした。本校の設定した資質・能力は、全体計画の目標として位置付けられているが、それぞれ幾つもの要素から構成されているので、育

成したい「探究的な見方・考え方」の具体を明確にすることが必要である。

総合的な学習の時間に働かせる「探究的な見方・考え方」については、「一つは、各教科等における見方・考え方を働かせるということである。」「二つは、総合的な学習の時間に固有な見方・考え方を働かせることである。それは、特定の教科等の視点だけで捉えきれない広範な事象を、多様な角度から俯瞰して捉えることであり、また、課題の探究を通して自己の生き方を問い続けるという、総合的な学習の時間に特有の物事を捉える視点や考え方である」と示されている。⁸⁾ しかし、大切なことは、各学校で設定する探究課題や児童の実態に応じて、具体化が図られることだと考える。

そこで、本校では、これまでの理科、社会科などにおける見方・考え方に関する研究の財産を活用した。それは、各教科の問題解決活動において発揮される見方・考え方を「アイテム」とネーミングとしたもので、それぞれの教科で児童が発揮する「アイテム」の中から、問題解決活動の中で教科を超えて汎用的に活用される見方・考え方を洗い出すことによって、総合的な学習の時間で活用される見方・考え方を明らかにし、本指導構想を実践する上で大切にしたい。(図7)

社会科の考え方一覧表(一部)				理科の考え方一覧表(一部)				総合的な学習の時間の 見方・考え方					
考え方		事象	活動	考え方		事象	活動	考え方		事象	活動		
多面的 追究		同一 事象	情報収集	時代(場所)をかえて 資料をかえて 出来事の前と後で		実験 観察	物や場所をかえて 方法をかえて 変化の前と後で		思考力、 判断力、 表現力等	比較・分類する	前のことと比べると 同じようなものを整理すると		
異なる 事象	一般化												グループの結果と合わせて 同じ資料だと考えることは 同じことが言えるということは…
			多面的に追究する	このことは他でも言えて 他でもそうか									
						俯瞰する	大きく見てみれば						
			総合する	まとめて言えば 全体としい言えることは									
真偽を問う	本当にそのことが言えるのか どの視点から言えるのか												
			生き方を問う	自分ならどうか 自分を見つめてみると									
学びに向かう力 人間性等													
多角的 追究		異なる 立場・ 視点	考察	自分たちの～と比べると 〇〇の点からみると～ これまでの～と比べると 日常生活(自分)から見ると 〇〇の立場から考えると… 時代をさかのぼって考えると 他の国(地域)からすると		実験 観察	他の追究方法で 条件を変えて 違う資料であっても… 違う事実があるけど… この中では言えるけど… 〇〇の点からみると～ これまでの～と比べると 日常の経験から見ると 今まで言えたことかすると 逆に考えると		思考力、 判断力、 表現力等	一般化する	他でもそうか 全体を見ると 大きく見てみれば まとめて言えば 全体としい言えることは		
多面的に追究する	このことは他でも言えて 他でもそうか												
													俯瞰する
総合する	まとめて言えば 全体としい言えることは												
													真偽を問う
生き方を問う	自分ならどうか 自分を見つめてみると												
			学びに向かう力 人間性等										

図7 総合的な学習の時間で育成する資質・能力

本研究に至る前は、総合的な学習の時間に育成する力は、評価の観点としても活用し、「見通す力」、「追究する力」、「表現する力」、「振り返る力」を設定していた。しかし、これらは児童が自覚的に活用するものではなかったため主体的な探究の推進力となり得ていなかった。また、内容に関する視点が反映されていないことも課題であった。そこで、これらの課題を解決するために、「アイテム」を活用することによって、より主体的な探究活動を生みだすことができるようにした。例えば、本校で設定した「真偽を問う」という「アイテム」は、学びに向かう力、人間性等に関わる資質・能力の一つである。これは、価値観が多様化し、絶えず変化する時代において、必要不可欠な見方・考え方であり、児童が各学年の探究課題を追究する際には、絶えず自他の探究を見つめ直し、最適なものへと導くうえで重要なものとなっている。

③探究課題の設定

探究活動は、目標の実現にふさわしいものであるとともに、その課題を学ぶことによってよりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくことに結びつくような資質・能力の育成が見込まれることが要件として求められている。

本校ではさらに、探究課題はテーマ「生き方の探究・生命の尊厳」が貫かれるよう、各学年の探究課題を設定した。第3学年では、身近な題材をもとに生命との出会いを大切に「生命・地域」を探究課題として扱い、第4学年では、自分が生きる周りに目を向け、生命の有限性にふれることができるよう「防災・人々」を扱う。さらに、第5学年では、待ったなしで解決しなければならない人間の生活に大きく影響を及ぼす「環境」を課題として学び、第6学年では、これまでの学びをもとに生命の関係性、連続性という視点から「福祉・国際社会」という課題で追究するように構成した。

「福祉・国際理解」を学ぶ第6学年では、持続可能な社会を実現するための行動の仕方を考え、自ら

社会に参画しようとする態度を育てることを主たるねらいとして取り組んだ。そこで、総合的な学習の時間の導入となるオリエンテーションでは、児童の主体的な追究を大切にして、「最終学年として総合的な学習の時間にどんなことを追究していきたいか。」と問いかけた。すると、児童からは前学年までの学びをもとに、「世界で見られる課題を考えたい。」「自分たちが住んでいる日本のことを考えたい。」という願いが生まれてきた。これは、前学年で環境を探究課題とし、自分たちが生きる社会や取り巻く環境に対する問題意識を高めて活動に取り組むことで培われた意識が発展し、さらに広い視野から社会と関わろうとする成果である。(図8) 学校全体として総合的な学習の時間の指導系統が一貫されることは、児童の意識を連続させ、高めていくことに有効であることを示している。



図8 SDGs講話を聞く児童

④「核となる活動」の位置付け

各学年で展開する活動の中に、「核となる活動」を位置付けた。これは、「生き方の探究・生命の尊厳」を児童が学ぶにあたって中核的な役割を担う活動で、象徴的に学ぶ活動である。「核となる活動」の設定については、探究活動は児童が主体となるものであることと活動相互の関連性を考慮しつつ、活動の質を高め、児童に共通の基盤となる認識を高めることができるように設定した。

「命の結びつき」をキーワードとする第5学年では、理科の学習内容との関連を図り、助産師グループの方を講師に迎え、「命の授業」を位置付けた。児童は図9のように胎児の模型を抱く体験や講話を通して、生命誕生の不思議さ、生命の神秘さ、その連続性の奇跡といった内容について実感をもって学んだ。



図9 「命の授業」での児童の様子

この「核となる活動」を終えた児童は「先祖にさかのぼると、たくさんの人が自分に関わっていることにびっくりしました。一人でもいなかったら、自分がいなくて、生まれてきたのは本当に奇跡だと思います。」と語った。

⑤各教科等との内容の関連付け

総合的な学習の時間と教科等の時間は、相互補完させながら展開することが重要である。総合的な学習の時間がねらいとして、教科で身に付けた力を横断的・総合的に発揮することが挙げられるが、教科学習の際にも総合的な学習の時間で学んだ内容との関連を意識し、より深化させていくことが、真の意味で重要である。将来社会を生きる児童には、常に多様な価値を融合させ、新たな価値を創造していく営みが求められるからである。

「命を守る」をキーワードとし、探究課題を「防災・人々」と設定した第4学年では、図10のように自助・共助・公助等を学ぶ単元「くらしを守る」の終末に地域の建築会社と連携して、子ども達が防災の庭を設計する授業を位置付けた。この授業で子ども達の考えた防災の庭は、建設会社の協力により実際のモデルハウスとして建築された。



図10 社会科と接続した防災の庭の設計事業

学習を終えた子ども達は、「それまで遊ぶだけであった庭が命を守る庭となった。」と庭に対するそれまでの価値を変容させていくことになった。この令和2年度の取組は、「子ども達が防災に参画し、避難所不足という社会の課題に立ち向かっている」と評価され、一般社団法人レジリエンスジャパン推進協議会主催第7回ジャパン・レジリエンス・アワードで準グランプリを受賞した。

こうした理科や社会科の取組以外にも、国語科では物語教材、体育科では体の発達、道徳では生命尊重に関わる教材等や特別活動などでも関連を図っている。それは、「生き方の探究・生命の尊厳」は、全ての学年で、全ての教科の内容の中にある「生命」や「生き方」に関わる内容を紡ぎ合わせることで、確実に育成していくことにつながると考えたためである。

IV. 考察・分析

【成果】

- ・令和3年度4月に実施した全国学力・学習状況調査の児童質問紙の質問項目「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか。」の結果は、前回の結果より14.3ポイント高くなり、全国平均と比較しても4ポイント高くなった。（図11）
- ・令和3年度7月に実施した保護者学校評価では、「主体的な学習」に対する評価が、74.2％と前年度より1.1ポイント向上した。学校評価の意見の中に「やないづアイテムを使うことにより、子ども達が分かりやすく意欲的に授業に参加することができるよい取組だと思います。」と意見があった。児童の主体的な学習に対する姿勢とアイテムの有効性が評価されている。

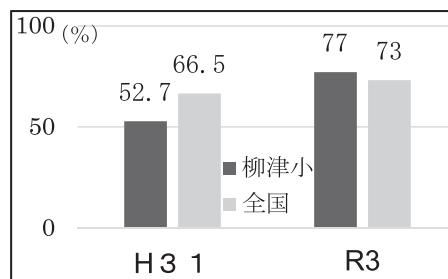


図 11 総合的な学習の時間の取組状況の変化

【課題】

- ・全国学力・学習状況調査の児童質問紙の質問項目「地域や社会をよくするために何かをすべきか考えることがありますか。」の結果は43.4％で全国平均より9ポイント低く、今後、このカリキュラムを通して学んだ児童の姿を経年的に実態把握し、指導・計画の改善を図る必要がある。
- ・総合的な学習の時間の設計に当たっては、学校課題や社会の要請を踏まえるためには、十分な時間をかける必要がある。今後はさらに、地域や社会と連携してカリキュラムを作成し、「地域に開かれた教育課程」を編成していく必要がある。

V. おわりに

総合的な学習の時間は、平成8年7月に出された「21世紀を展望した我が国の教育の在り方」（中央教育審議会第一次答申）において、ゆとりの中で「生きる力」をはぐくむという方向性の下、創設が提言された。その後、教育課程審議会答申（平成10年7月）を受けて、小・中学校では平成10年12月に告示された学習指導要領において初めて教育課程に位置付けられた。以後、各学校が実態に応じて創意工夫を生かした学習活動を様々展開したものの、テーマ別学習に陥りがちで付けたい力が曖昧であるなど課題が指摘されてきた。しかし、世界規模でSDGsの大切さが叫ばれるなど、想定以上に変化し続ける昨今の社会情勢を背景として、今こそ、まさに児童生徒に、主体的・探究的・協働的に学ぶ力の育成が求められている。今回は、そのような動向を踏まえ、どのように総合的な学習の時間の指導を設計するとよいのかについて実践研究を行い、グランドデザインを試作した。今後は、さらに、具体的な授業ベースの実践を積み上げ、児童が主体的に新たな価値を創造する力の向上に資する主体的・探究的・協働的な学習の在り方を検証したい。そして、総合的な学習の時間を教科等横断的なカリキュラム・マネジメントの軸として、「地域に開かれた教育課程」を工夫・編成したい。

注・文献

- 1) 文部科学省(2017):「小学校学習指導要領(平成29年告示)」, 文部科学省, 15.
- 2) 文部科学省(2021):「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開」, 文部科学省, 9.
- 3) 文部科学省(2019):「小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編」, 文部科学省, 89.
- 4) 教育再生実行会議(2015):「これからの時代に求められる資質・能力と、それを培う教育、教師の在り方について」(第七次提言) 平成27年5月14日, 2-3.
- 5) 白井俊(2020):「OECD Education 2030 プロジェクトが描く教育の未来 エージェンシー、資質・能力とカリキュラム」, ミネルヴァ書房, 79-81, 151-159.
- 6) 岐阜市(2020):岐阜市教育大綱 令和2年12月24日改定 岐阜市
- 7) 河村泰代(2010):岐阜大学教職大学院開発実践報告(2010)「生命の教育」に関する開発研究, 3-5 を参考に本校構想図に6つの生命観を設定した。
- 8) 3) に同じ, 10.